

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.39 (2019年3月30日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：東洋音楽学会 沖縄支部

事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西潤子

東洋音楽学会 HP： <http://tog.a.la9.jp>

【第71回定例研究会記録】

日時：2019年2月16日(土) 14:00~16:00

場所：沖縄県立芸術大学音楽学部大合奏室

参加費：会員・非会員ともに無料(予約不要)

内容：「座談会：台湾原住民の音と音楽の世界」

ゲスト：島の音グループ 国吉宏昭 坂元健吾

砂川敏彦 HIRARA 並里亜衣

モデレーター：小西潤子

■座談会要旨

本座談会は、地元・沖縄で活動するコーディネータや実演家からの学問へのニーズに応えるかたちで、学問、知識、理解の応用や社会に開かれたまなびの場としての学会のあり方を実践的に考える場として設定したものである。モデレーターによる趣旨説明に続いて、ゲストの国吉宏昭氏が、「島の音」グループ結成の経緯について説明した。国吉氏は、NPO 法人沖縄県立美術館支援会 happ 理事として、2017年6月台湾原住民との交流イベント「島嶼音楽季」でのシンポジウムを企画した。その後、島嶼音楽季に参加したミュージシャンらに新しい音楽づくりを呼びかけるとともに、民族音楽学的知見を広げようと考えた。

続いて、並里亜衣氏が「今日における台湾原住民音楽と舞踊」について概要説明を行い、参加者が情報共有した。台湾原住民の音楽と舞踊は、現地集落や学校でのサークル活動、ミュージシャンや現代舞

踊団、沖縄など台湾外との交流を通じて、循環的に現代的な伝承が行われている。坂元健吾氏は、ベーシストとして2018年6月台湾台東で開催された島嶼音楽季に参加した。その際、台湾原住民との交流は音楽に先立って文化理解から始まったこと、自然環境の中で演奏をする体験を通して、「場」の重要性を強く感じたことについて述べた。

HIRARA氏は、出身地・宮古島の祈りの歌《中屋まぶなりや》に続けて、《Anna Ina (Mother)》を砂川敏彦氏のギター、坂元氏のベースの伴奏でうたった。後者は、2015年伊江島ユリ祭りでHIRARA氏の歌唱を聞いたアミ族のCMO楽団からの招聘をきっかけに、共同製作された。HIRARA氏が掘り起こした宮古島城辺に伝わる歌《アンナ(母)》の歌詞とメロディに、アミ語の歌詞が加わったものである。これを含むアルバム『直美』は、2018年6月、第29回金曲獎で最優秀原住民語アルバム賞を受賞した。同じく宮古島出身の砂川氏は、台湾原住民文化の多様性は沖縄の多様性にもつながることについて触れた。そして、島の音グループの今後の活動展開について、自然と共に生きる歌を収集して地域の歌との融合をはかっていたと述べた。

モデレーターは、「島、多様性、交流、自然、共同体、つながり、ルーツ」などのキーワードをあげ、参加者とのディスカッションを行った。そして、地元で活動するコーディネータや実演家がこれらのキーワードをもとにイメージーションを膨らませながらアイデンティティを模索し、創造的な活動に携わっていること、民族音楽学研究はエビデンスと

しての資料を提供するのみならず、そのプロセスに
参与することで貢献する可能性について述べた。

(文責：小西潤子)



写真1 《Anna Ina》 歌:HIRARA、ギター:砂川敏彦、
ベース:坂元健吾(各氏)



写真2 参加者によるディスカッション

■傍聴記

本座談会は、台湾と沖縄の繋がりについて様々に考
え活動するグループ「島の音」の方々をゲストに迎
え、本学会沖縄支部長の小西潤子氏がモデレーター
として各登壇者の発表内容を紡いでいき、最後に総
括するという流れで進行した。

先ず、「島の音」代表の国吉宏昭氏から、沖縄と東
南アジアの繋がりや「島嶼音楽季(フェスティバル)」
を通した台湾原住民音楽と沖縄音楽の関わりにつ
いて説明があった。続いて登壇した並里亜衣氏から

は、今日の台湾における原住民音楽と舞踊の伝承方
法と対外的な上演活動の取り組みに関する報告が
なされた。途中、フロアから「場によって原住民ら
しきの使い分けのようなものはあるか」という質問
があり、海外公演ではコンテンポラリー作品におい
ても原住民らしさを強く出す場合がみられる、との
回答があった。次に、ベーシストの坂本健吾氏が、
2016年に参加した島嶼音楽季の経験を、映像を交
えて紹介した。この音楽フェスは、ステージパフォー
マンスよりも現地との直接的な文化交流に重きを
置いており、現地を理解し考えることを主体とし
ていることが示された。HIRARA氏は宮古島の古謡
をアレンジした二曲を披露した。《Anna Ina》とい
う曲は、アミ族の人から母を歌った曲をリクエスト
されたことをきっかけに宮古古謡の探索を行った
こと、「アンナ」は宮古方言、「イナ」は台湾アミ族
語で共に「お母さん」の意味であり、2つの地域の
言葉を混ぜて歌詞を補作していることの説明があ
った。砂川敏彦氏は、自然とともに生きる歌、各地
に根ざす歌の二点をテーマとして掘り起こしを図
っていきたいと述べ、また沖縄の音楽や言葉のルー
ツを探っていきたい、という希望も語った。

後半の質疑の時間では様々な立場から活発に議論
が交わされ、盛り上がりを見せた。原住民も日常は
国語(公用語;標準中国語)を用いるなかで、地元
の言葉を維持することができているのかという問
いに対し、並里氏は、地域の行事では地元の言葉
を用いるのが基本で、言葉はそこでも継承されてい
くと述べた。なぜ原住民音楽はポップ・ミュージック
に昇華するのかという質問に対しては、会員の久万
田晋氏より、ポップにしたほうが入りやすい一方
で、神歌などのようにポップ化しないものもある
というコメントがあった。

学会や研究会という場合は、基本的にアカデミッ
クな見地と経験に基づいて議論が繰り広げられる
空間であり、そこは知的好奇心が満たされる場
でもあるが、ややもするとマニアック過ぎたり、
あるいは極めて閉鎖的で「外野」が足を踏
み入れ難い、「外野」が覗くことすら憚ら
れる空気で溢れてしまうことがある。また、
誤解を恐れずに言えば、アカデミックな
立場にいる我々自身、その閉鎖性や社会
との繋がりの欠如に気づくことなく内輪
で問答を繰り返

し、「わかる人だけがわかる」世界に浸かって満足感に満たされている嫌いがある。今回のような、音楽実践を通して台湾原住民文化と向き合うゲストの活動報告は、我々がふだん行なう現地調査や眼差しとの共通点や相違点を多分に見いだすことができ、興味が尽きず、有意義な会となった。他方、総括で小西氏が述べたように、フィールドの「音」を素材として用いるだけでなく、現地におけるその音の脈略をエビデンスに基づいて理解することの必要性は、学問においては言うまでもない。実践家らの間でもそのような意識が広がれば、文化交流により深みが増すだろう。

支部例会が、今後もアカデミックな議論と情報交換の場であるとともに、市井の人々に対しても門戸を開き、音楽研究の地域への還元および自/他文化の相互理解の場となることを切に願う。

なお、本例会の冒頭では、去る2月7日に逝去された本学会会員の中村透氏に黙祷を捧げた。沖縄の歴史や文化、芸術に深い愛を注ぎ、琉球音楽を題材とした楽曲を数多く手がけてこられた氏に、心からご冥福をお祈りいたします。(報告：長嶺亮子)

東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 39 編集委員
長嶺亮子、古謝麻耶子、遠藤美奈、多和田真理
次号 No. 40 は 2019 年 7 月に発行予定